

後拾遺集一一六二番和泉式部詠歌の本文異同と受容

福島 尚

はじめに

後拾遺集一一六二番（新編国歌大観番号、旧国歌大観番号では一一六四番）和泉式部詠歌は、貴船明神の返歌とともに、人口に膾炙するものである。ひとまず、近世以来の流布本である正保版二十一代集本によって掲出すると次のごとくである。

男にわすられて侍けるころ貴布祢にまいりてみた
らし河に蜚のとひ侍けるをみてよめる

物思へはさはのほたるもわか身よりあくかれ出る玉か
とそみる

御返し

おく山にたきりて落る滝つ瀬の玉ちるはかりものな思

ひそ

この歌はきふねの明神の御返しなり 男の声にて
和泉式部か耳に聞えけるとなんいひつたへたる

この和泉式部詠は、和泉式部集のいわゆる「正集」「続集」
には見えず、勅撰集所収歌を主体として編纂された「宸翰
本」「松井本」（いずれも私歌集大成本による）に、

〔宸翰本和泉式部集〕

おとこにわすられて侍ける比、きふねにまいりて
御たらし河にほたるのとひ侍しを見て

ものおもへはさはのほたるもわか身より あくかれい
つる玉かとそ見る

御返し

おく山にきたりておつるたきつ瀬に 玉ちるはかり物
なおもいそ

〔松井本和泉式部集〕

おとこに忘られて侍けるころ、きふねにまいりて、
みたらし川に螢の飛侍けるをみてよめる

物思へは沢のほたるもわか身より あくかれ出る玉か
とそみる

御かへし

おく山にたきりて落るた滝つせの たまちる斗ものな
思ひそ

とみえるものである。もとは伝承歌であろうが、後拾遺集に選入されたことで広く知られることになったものだと考えてよいであろう。

ところで、一一六二番歌には、右に掲げた正保版二十一代集本にもあるごとく、四句目に本文異同があり、それによるとそこは「あくかれにける」ということになる。岩波書店新日本古典文学大系本、和泉書院和泉古典叢書本、犬養廉・平野由紀子・いさら会『後拾遺和歌集新釈』（笠間書院・一九九六年）等の注釈書は、「あくがれいづる」という本文を採用しているが、その一方で、その奥書に蓮華王院藏撰者自筆本との校合をいう太山寺本を底本とする藤本一恵『後拾遺和歌集全釈』（風間書房・一九九三年）は、「あくがれにける」という本文を採用している。のみならず、後拾遺集の伝本の分類を試みた、後藤祥子「後拾遺和

歌集の伝本―その系統と性格―」（日本女子大学紀要二二・一九七三年三月）掲載の校異表を参看すると、相当数の伝本が「あくかれにける」という本文を有していることがわかる。後藤氏によれば、後拾遺集一一六二番（新編国歌大観番号、旧国歌大観番号では一一六四番）の第四句には、①「あくがれにける」②「あくがれにたる」③「あくがれいづる」の異文があり、氏の調査された諸本のうちでは、徳久迺文庫蔵承元二年識語本が②の本文を有する他は、①あるいは③、ないしは、①または③の一方を根幹本文として他方を傍記する本文を有する。とすれば、後拾遺集一一六二番（新編国歌大観番号、旧国歌大観番号では一一六四番）和泉式部詠については、現在のところ、③が一般的に本文であるかのように感じているが、当該歌の受容を考える場合、①の本文も閑却し得ないのではないか。そうした観点から、本稿では、院政期・鎌倉期における当該歌の本文異同と受容の様相とについて、いささか考察を試みてみたい。

一 後拾遺集の諸本内での本文異同の状況

本論に入る前に、前提となるべき後拾遺集の諸本分類説について復習しておく。

松田武夫『勅撰和歌集の研究』（電通出版部 昭和十九

年)に始發し、上野理「後拾遺集の成立について」(国文学研究二三・一九六一年三月)・「後拾遺集」(和歌文学講座4・一九七〇年)等、嘉藤久美子「『後拾遺和歌集』諸本の研究方法に関する再吟味」(金城国文一九一一・一九七二年九月)等の研究を経て、諸本を十系統に分類する前掲の後藤祥子氏の論考に至つて後拾遺集の諸本分類の試みは一つの到達点に至つたようである。後藤氏はその後、新編国歌大観本(底本は、解題にいう「三、自筆本系(一)為家相伝本」の(イ)書陵部蔵為家相伝本)の解題を執筆されている。次にそれを略抄する。

古い写本の多くは、書名を後拾遺和歌抄とする。主な系統を成立順にあげると次のようになる。

一、草稿本系統 (イ)静嘉堂文庫蔵伝甘露寺経元筆本

(ロ)東京大学附属図書館蔵南葵文庫本

これらは改稿の際除かれた数首(本文参照)を持ち逆に改訂で加えられた五六番歌「わがやどの」を持たない。

二、家本系統 (イ)書陵部蔵桂宮本廿一代集 (ロ)同一

四冊本八代集 (ハ)京都大学附属図書館蔵堀氏寄贈

本

家本は次のような奥書を持っている。

本日／都合和歌千三百十八首 内無名六十首返歌五

十首 以／礼部納言家本書写之、件本者／朱雀帥伊房卿自筆也、儉雖書／入自歌二首、通俊批校之時、合懸／鉤畢云々、筑前守忠仲伝持之、今／本是也、披閱之处、与目錄符合、足／為証本歟、於勘物者清輔朝臣所／注付也(以下略)

しかしこの系統のどの本も、伊房の歌は他本と同じく一一七三番の一首のみであり、かつ清輔注という勘物もない。一方五六番歌とその前の異本歌を合わせ持ち、卷十四「難波渦」(後撰歌)がある。また歌の位置に異同が見られる。

三、自筆本系 通俊自筆を示す奥書(後掲)を持つ。

伝来奥書によりさらに次の三種に分かれる。

(一)為家相伝本 (イ)書陵部蔵為家相伝本 (ロ)江守賢

治氏蔵本(下巻のみの零本)

これらは自筆本系奥書を挟んで為家・為相相伝を示す奥書(後掲)を持つ。

(二)源承法眼本 書陵部蔵卅九冊本廿一代集本

為家本を息源承法眼、さらに僧乗尋が写し伝えたもので、文永二・弘安五・正安元年の書写奥書を持つ。本文は(一)にきわめて近く貼紙で異本歌を伝える。

(三)その他 西下経一氏蔵初雁文庫甲本(国文学研究資料館寄託)・岩国吉川家蔵八代集本・鹿兒

島大学玉里文庫藏宗仲庵写本等は自筆本系奥書の他に諸種の書写奥書を持つが、本文はかなり異なる。

四、流布本系（順徳院本系） 田中塊堂氏藏八代集本

従来流布の底本、正保四年刊廿一代集本や八代集抄本の本文に最も近い古写本である。上下巻に貞治三年の書写奥を持ち、それに先立って順徳院御本（黒表紙）が二条為氏に伝わる経緯を記す。同奥書は書陵部藏一一冊本八代集にものせるが本文は異系統。

五、古本系統 鎌倉南北朝期の書写と目されるもの

に、(イ)陽明文庫藏伝為家筆本（上巻のみの零本）
(ロ)広島大学今中文庫本伝光明峰寺殿（道家）筆本（巻一のみの零本）
(ハ)今井和行氏藏伝兼好筆本（三）太山寺藏本（ホ）穂久迺文庫藏承元二年識語本（巻十七以下の零本）
(ヘ)国学院大学藏伝定為法印本等があるが、一々四のいずれの系統とも完全に一致するものはなく、かつ相互に異同がみられる。

底本は通俊自筆本系のうち為家相伝本系の写本で、冷泉家藏本の忠実な臨模本と思われる。室町時代写一冊。書陵部藏（四〇五・八七）。作者勅物注記。各巻

頭に所収歌数注記。諸本による校合書入れ等がある。奥書は次の通り。

出家以後譲与／小男拾遺為相了／桑門判

長承三年十一月十九日以故礼部納言自筆本／書留了件本奥云々寛治元年九月十五日／為披露世間重申下御本校之先是在世／本相違歌三百余首不可信用件本其／由具書目錄序 通俊／朝散大夫藤原相伝秘本也／戸部尚書為家

後拾遺集は白河天皇の下命により応徳三年（一〇八六）九月、藤原通俊の手に成った（仮名序）。その後一〇月奏覧。翌寛治二年再奏。目錄序執筆（同序）。全二十巻。一二一八首。

掲出する諸本の数を減じ、前稿の十分類を簡略化しているかと見られるが、その一方で「古本系統」として新たな分類を加え、そこに数本の分属替えをしているようである。また、岩波書店新日本古典文学大系本（底本は新編国歌大観本に同じ）の解説（平田嘉信）は、それまでの研究史をふまえて次のように記す。

『後拾遺集』の流布については、三で扱ったこの集の成立過程と相關させて考えていく必要があるだろう。底本およびその元本である冷泉家本は、奥書によ

れば、寛治元年（二〇八七）二月の再奏本そのものではなく、九月に通俊がその御本を下げてもらい、善本を世に「披露」するためにさらに校訂を加えた一本の流れだと言う。通俊の何次かにわたる編纂作業においての最終段階を示す、いわば決定版ともいふべき位置にある伝本である。

この系統本に至るまでに、想定できるだけでも、次のような段階での諸本が世にあったものと考えられている。今、後藤氏の整理を参考にしながら示してみよう。

応徳三年（二〇八六）春、草稿完成↓後拾遺問答本

経信・康資王母・周防内侍らに見

合わせ↓草稿本

伊房清書↓家本 隆源清書↓隆源

清書本 九月十六日奏上 十月中

句奏覽↓奏覽本

寛治元年（二〇八七）二月、再奏↓再奏本 八月、目録

・序奉献 九月十五日、通俊書写

↓自筆本

時期不詳

流布本

従来、諸本の分類は、奥書や仮名序・目録序を参勘しながら、この想定される本のいづれに属するかを測ることに精力が費やされてきたと言つてさしつかえない

だろう。松田武夫・上野理・嘉藤久美子・後藤様子・糸井通浩・藤本一恵らの諸氏による精緻にわたる諸本の調査と分類への試みによつて、この集の伝本研究は著しい進展を見せ、その限界や問題点も次第に浮き彫りにされつつある。諸氏の論に共通する認識は、先の表示のように、成立過程はほぼ迫れるものの、そこから推定される純粹な本文を有する伝本は皆無と言つてよいという事実を踏まえたものであり、また、本文はきわめて初期の段階から混態現象を繰り返し、諸本自体の内実は複雑をきわめているため、いづれの立場からの分類も十全なものは期待できないとするものであった。

右のごとき、諸本研究の現状を踏まえた上で、前掲の後藤氏の論考に示された、一一六二番歌の第四句の本文異同に、その後影印や翻刻のかたちで公刊された後拾遺集の本文によつて私に確認・追加しえたものを加えて、後藤氏による新編国歌大観本解題における分類に示された諸本においてはめるかたちで、一一六二番歌の第四句の本文異同の状況を次に示してみる。本文異同の示し方は、前掲後藤氏論考で付された番号により、根幹本文に傍記本文がある場合は、傍記本文を丸括弧にくくつて示した。

一、草稿本系統

静嘉堂文庫藏伝甘露寺経元筆本「廿」↓③
東京大学附属図書館藏南葵文庫本「南」↓③

二、家本系統

書陵部藏桂宮本廿一代集「書四〇〇——一〇」↓①
同一四冊本八代集「書五一〇——一二」↓①

三、自筆本系

(一)為家相伝本

冷泉家藏為家相伝本（冷泉家時雨亭叢書）「冷為」↓①

(③)

書陵部藏為家相伝本「書為」↓① (③)

江守賢治氏藏本（下巻のみの零本）「江」↓①

*為家相伝本と極めて近いものとして

歴博藏田中家旧藏本（国立歴史民俗博物館藏 貴重典籍

叢書「文学篇」）「歴田」↓①

(二)源承法眼本 書陵部藏卅九冊本廿一代集本「書四〇三—

一二」↓③

(三)その他

西下経一氏藏初雁文庫甲本（国文学研究資料館寄託）「初

甲」↓① (③)

岩国吉川家藏八代集本「吉八」↓③

鹿児島大学玉里文庫藏宗仲庵写本「玉」↓③

四、流布本系（順徳院本系）

田中塊堂氏藏八代集本（順徳院御本）「田順」↓① (③)

陽明文庫乙八代集本（陽明叢書）「陽乙」↓③

正保四年刊廿一代集本「正」↓③ (①)

八代集抄本「抄」↓③

五、古本（系統）

今井和行氏藏伝兼好筆本「今」↓③

太山寺藏本「太」↓①

穂久迹文庫藏承元二年識語本（巻十七以下の零本）「承」

↓②

岩波書店新日本古典文学大系本解説にいうごとく「（各系統の）純粹な本文を有する伝本は皆無」で「本文はきわめて初期の段階から混態現象を繰り返し、諸本自体の内実は複雑をきわめている」ということであるから、一一六二番歌の第四句の本文異同の場合も明快な整理を許さないようである。しかし、新大系解説に「通俊の何次かにわたる編纂作業においての最終段階を示す、いわば決定版ともいうべき位置にある伝本」と評価される為家相伝本（「冷為」「書為」）がその根幹本文が①「あくがれにける」になっていたり、それと同系の「江」「歴田」も①の本文を有することは注目してよい。そこで次節では為家相伝本の本文を中心に本文①について述べる。

二 為家相伝本の本文

為家相伝本は、「冷為」の忠実な転写本である「書為」によつて、新編国歌大観本、岩波書店新日本古典文学大系本、和泉書院和泉古典叢書本、笠間書院版『後拾遺和歌集新釈』といった現代の代表的活字本の底本になっている。そのうち新編国歌大観本は、

をとこにわすられて侍けるころきぶねにまゐりて
みたらしがはにほたるのとび侍けるをみてよめる

和泉式部

ものおもへばさはのほたるをわがみよりあくがれにけ
るたまかとぞみる

御かへし

おくやまにたがりておつるたきつせにたまちるばかり
ものなおもひそ

このうたはきぶねの明神の御かへしなりをと
このこゑにて和泉式部がみみにきこえけるとな
んいひつたへたる

のごとくに①を根幹本文として③を傍記する様態を再現しようとするが、その他は、傍記本文③を採用している。こ

れらの活字本が、傍記・ミセケチの極めて多い「書為」を翻刻するに際して、そのほとんどがミセケチ訂正後の形に整えて本文を提供していることは、すでに浅田徹「後拾遺集為家相伝本をめぐる」(樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』笠間書院・一九九七年)で指摘されていた。

浅田氏はその親本である「冷為」(この時点ではその全貌は未公開)の部分写真(アサヒグラフ昭和五十六年四月号のカラー写真)で見た場合、「冷為」に元から書かれていた本文(浅田氏は「もとの本文」という)と傍記・ミセケチ(浅田氏はそれらを「もとの本文」とは別筆とみて「上書き本文」という。但し、傍記・ミセケチの中には、本文と同筆のものも少なからずあることも指摘)との二つの層が認められることを指摘し、そのそれぞれの層の検討の必要性を述べられた。そして、浅田氏は、為家相伝本は定家が所持していたが俊成本や定家本ではないこと、清輔本系統の勘物を持った本文で上書きが行われているがその本も清輔本や顕昭本とは距離があること、の二つが判明するとして、為家相伝本は定家の証本ではなく、定家の関与によつて六条家本の資料として作成されたものとの見解を示された。

これをうけて「冷為」の原本調査によつて執筆されたのが、後藤祥子氏による冷泉家時雨亭叢書の解題(一九九八年)である。後藤氏によれば、「冷為」は、奥書に「長承

三年十一月十九日以故礼部納言（通俊）自筆本書留了」という朝散大夫藤原某による書写本そのものではなく鎌倉初期写かと推定される転写本であり、その親本である長承三年（一一三四）本の書写者は、当時「朝散大夫」（従五位下）であつた藤原俊成である可能性は皆無ではないが極めて低く、『古来風躰抄』所引の後拾遺集歌本文と比較した場合、該本との結びつきが本文の上では認められず、たとえ俊成と接点があつたとしても、手沢本のような性格のものではなかつたと考えられるとのことである。また、後藤氏は、定家の秀歌撰集（『定家八代抄』や『五代簡要』）との関係についても、秀歌撰集編纂の机辺において該本が重要視されたとはいえないと考えられている。後藤氏は、該本における異文注記（それは本文と同時期の作業がほとんどである）と見なしてよいとされる）の様相を見た場合、

- (1) 書写後、原本と見合わせ、ないし通読による明らかな誤写の訂正。

(2) 他本との校合が明らかな例。

(3) 他系統本との校合による（その多くは該当部に単点や双点を付した）訂正と見られる例。

の三種類に大別できるとし、(2)のうちの「イ」印や「ヒ」点のあるものは親本の異文を転写した可能性が高いと考えられるものであるが、それは極少でたまたま気付いた異同の注記程度、また、(3)の単双点を伴うおびただしい異文注

記は、『古今集』証本などに定家の行ったそれとは性格を異にするようであつて、定家の秀歌撰集（『定家八代抄』や『五代簡要』）との関係性の薄さともあいまって、その校合を定家の所為とするのは躊躇せざるを得ないとされている。

ただそれにしても、冷泉家蔵為家相伝本は、通俊の何次かにわたる編纂作業においての最終段階を示す、いわば決定版ともいうべき位置にある「礼部納言自筆本」の写しである長承三年本の鎌倉初期転写本であることは認めてよい。

この本とともに、注目されるのは歴博蔵田中家旧蔵本「歴田」である、これは『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書（文学篇）三』（臨川書店・二〇〇一年）として、武田早苗氏の解題を付して影印本として公開された。解題によれば、該本は、今は失われているが、かつては為家相伝本にもある長承三年云々の奥書を有していた鎌倉時代後期写本である。冷泉家蔵為家相伝本との直接的な書承関係は想定しがたいが、本文的には近い関係にあり、遡れば同一の一本に行き着くと推定されるという。

さて、いま一一六二番歌の本文についてみると、「冷為」は、

ものおもへはさはのほたるをわかみよりあくかれにけ

るたま^るとそみる^か

二句目の「を」には双点がついて「も」を傍記、四句目「にける」には双点がついて「いつる」を傍記、五句目「か」は傍記（これは書き落としを補ったものであろう）。

「歴田」は、

ものおもへはさはのほたるをわか身よりあくかれにける
たまかとそみる

となっていて、四句目は①「あくかれにける」である。さらに、上巻奥書と下巻奥書とにそれぞれ「以蓮華王院宝藏本通俊卿自筆校合了／但冬歌以下本文之間不能校之」「曆応二年八月以撰者自筆本^{蓮華王院宝藏本}／校合直付了作者注等任本書加之／但件本自第六至第十五卷欠失了／仍不能校之」とあって通俊自筆本によって校合を加えたという太山寺藏本（藤本一恵『太山寺本後拾遺和歌集とその研究』桜楓社・昭和四六年による）を参照すると、

ものおもへはさはの蛩をわかみよりあくかれにけるた
まかとそみる

とあって、これも四句目は①の本文を持つ。後藤氏は「冷

為」解題において、太山寺本独自異文とされるものがあるの比率で「冷為」の本文と一致することをもって、両本は相互に撰者自筆本といわれる伝本の存在を保証しあうものであり、つまるところ「冷為」は撰者自筆本の面影を伝える貴重な古本として位置づけることができるといっておられる。そのように考えられるのであれば、問題の一一六二番歌において、「冷為」の根幹本文・「歴田」・「太」の三者に共通して①「あくかれにける」の本文を有することは見過ごすことのできないことではないか。①が撰者自筆本における一一六二番歌の本文であつた可能性をこのことが示唆しているようにも思われる。

三 「あくかれにける」系本文の受容

本節では院政期鎌倉期の歌書類における一一六二番歌の①「あくかれにける」系本文の受容について述べる。

『俊頼髓脳』（天永二年（一二二）以後永久三年（一二五）以前の成立）には、次のようにある。

いつみしきふか保昌にわすられてきふねにまいりてよ
めるうた

ものおもへはさはのほたるをわかみよりあくかれ
にけるたまかとそみる

明神の御返し

おく山にたきりておつるたきつせにたまちるはかり物なおもひそ

これは御社の内にこゑのありてみゝにきこえけるとそしきふ申ける

後拾遺集と比較すると、後拾遺集詞書に「をとこ」とあるのに「保昌」（和泉式部の最後の夫である藤原保昌）の名をあてる他は、いささか後拾遺集詞書を簡略化した内容となつてゐる。右は、ひとまず冷泉家藏定家監督書写本（冷泉家時雨亭叢書の影印本による。赤瀬知子「受容と諸本——『俊頼髓脳』諸本考——」（『院政期以後の歌学書と歌枕』清文堂・平成十八年）の分類にあてはめれば、広本の定家本に属する。国会図書館蔵本の祖本）によつて引用したが、静嘉堂文庫蔵『無名抄』（前掲赤瀬氏論考によれば、広本の顕昭本に属する）・久迩宮家旧蔵本（広本の顕昭本に属するようだが定家本との中間の本文を有する。日比野浩信『久迩宮家旧蔵本俊頼無名抄の研究』未刊国文資料刊行会。平成七年 参照）・関西大学図書館蔵『俊秘抄』（前掲赤瀬氏論考にあてはめれば、略本Ⅱ類に属する）・静嘉堂文庫蔵『俊頼口伝集』（清水浜臣本。前掲赤瀬氏論考では、略本Ⅰ類に属する）・『唯独自見抄』（冷泉家本・書陵部本・島原松平文庫本・彰考館本）等の諸本と比較すると、『唯

独自見抄』諸本で和泉式部詠歌が③「あくがれいづる」系本文である他はほぼ同文である。

また、保安二年（一一二一）九月十二日関白内大臣歌合の判詞に、当該歌が引かれている。

六番 左持 親隆

三九 つゆしげみさこそこひするやどならめたま
るにはひとやみるらむ

右 為真

四〇 みどりなるたまぬきちらすこちしてこけむ
すにはにおけるあさつゆ

左歌、つゆしげみさこそこひするやどならめ、といへることばこそつづきもなきやうにはべれ。又、つゆしげきやどにはかみならずこひすることにやはあらん。又、玉ちるにはもいとおどろおどろしう、されば露のたまにはあらで、いづみしきぶがきぶねにまゐりてよむうたに、ものおもへばさはのほたるをわがみよりあくがれにけるたまかとぞみる、御かへし、おく山にたぎりておつるたきつせにたまちるばかりものなおもひそ、とはべれば、たまちるといふことはつゆのうたかなひたりともおぼえはべらず。右歌、しそく五寸がうちに十首などよむうたのこちしはべればあしよしまうすべきほどにもはべらざめり。さればちとや申すべ

き

(裏書) 左歌、たまちるとよめる如何。貴布禰明神託宣和泉式部歌に、たまちるばかりものなおもひそ、とよめるにおもひよそへたるか。それはたましひちるとよませたまへるなり。さればつゆにはいかがあるべからん。方人申云、露は玉にいたり、涙も玉にいたりとよめればその難いかがはべるべからん。判者なほかたぶかれて、持とぞみゆると申す。右歌ことなるなければなり。

右は二十卷本歌合複製(日本古典文学会)を底本とする新編国歌大観本により引用。本歌合の主催者は藤原忠通。判者は藤原基俊。裏書の判詞は、当座の判、表の判は後日推敲した判と考えられている。裏書きには当該歌に答えた神詠の一部「たまちるばかりものなおもひそ」のみを引くが、推敲後の表の判では和泉式部歌と貴布禰明神託宣歌との全体を引用する。しかもそれが①「あくかれにける」系本文であることは注意すべきで、基俊にとって証歌として想起される後拾遺集一一六二番歌は「あくかれにける」系本文であった。

藤原定家による秀歌撰集『五代簡要』は、定家自身の作歌備忘用に供したと考えられるものである。その冷泉家蔵本(冷泉家時雨亭叢書に影印。上條彰次解題)は、定家自

筆部分また承元三年(一二〇九)の自筆奥書のある定家手沢本である。そこには、後拾遺和歌抄の巻第二十の所に一一六二番歌が引かれて次のごとくにある。

物思はさはのほたるも我身よりあくかれ(「くかれ」ノ三字重ネ書キ、下ノ字「□□」にけるたまかとそみる

定家にとつても作歌備忘として想起されるのは「あくかれにける」系本文であったようである。

このように見てくると、俊頼・基俊・定家といった当代の錚々たる歌人たちが想起した一一六二番歌は「あくかれにける」系本文であったことになり、当該歌の受容を考える上でこのことは注意されてよいことである。

四 「あくがれいづる」系本文の受容

その一方で、第一節に掲げた後拾遺集の諸本内での一一六二番歌の本文異同の状況によれば、③「あくがれいづる」系本文を有する本も、草稿本系統の「甘」「南」や流布本系諸本の多くなど相当数存在する。そこでこんどは、「あくがれいづる」系本文の受容のありさまをみてみる。

藤原範兼『和歌童蒙抄』(元永元年(一一二六)から大治二年

(二三七頃までに成立か)は、『俊頼髓腦』や藤原基俊の所説を多く吸収しながら著された歌字書であるが、しばらく日本歌学大系本によって示せば、そこには、

魂

物思へば澤の蛸も我身よりあくがれ出る玉かとぞ
見る

後拾遺廿に有。和泉式部保昌に忘られて侍りける頃、
貴船にまゐりて蛸の飛を見てよめる也。

奥山にたぎりて落る瀧津瀬の玉ちるばかり物な思

ひそ

となん貴船の大明神をとこの声にて詠じおはしまして
る。式部其後重明親王のおぼえたぐひなくして、別に
なん有ける。親王隠れ給ひて後は尼に成けりとぞ。

とある。おそらくは『俊頼髓腦』を参照してのことであろう、後拾遺集一一六二番歌詞書で「をとこ」とあるところに保昌を比定しているが、歌の本文は「あくがれいづる」系本文を採用している。範兼は、歌仙歌合形式の秀歌撰である『後六々撰』における当該歌選入にあたっても、「ものおもへば沢の蛸も我が身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る」(新編国歌大観本による)と「あくがれいづる」系本文を用いているので、範兼によって想起・選択された一

六二番歌は「あくがれいづる」系本文であったのであろう。藤原清輔の『袋草紙』希代歌には、当該歌は次のように引かれる。

貴布祢御歌

オカヤマニタギリテヲツルタギツセノタマチルバ
カリモノナ思ソ

是、和泉式部詠「貴布祢」テ詠云

モノオモヘバサハノホタルモワガミヨリアクガレ
イヅル玉カトゾミル

于^レ時男声ニテ式部ガミ、二聞歌云々。

ひとまず小沢正夫・後藤重郎・島津忠夫・樋口芳麻呂『袋草紙注釈』(塙書房・昭和四九年)の本文によったが、同書また藤岡忠美・芦田耕一・西村加代子・中村康夫『袋草紙考証 雑談篇』(和泉書院・平成三年)によって本文の校異を参照しても、和泉式部詠歌に異同はない。これも「あくがれいづる」系本文である。

目を説話集に転ずれば、『古本説話集』『世継物語』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』に右の和泉式部詠歌と貴船神詠とが収載される。

『古本説話集』上巻第六話「帥宮通和泉式部事」(岩波文庫本による)の一部に、

やすまさにわすられて侍けるころ、きふねにまいりて、
みたらし河に、ほたるのとびけるをみて、

ものおもへばさはのほたるもわが身よりあくがれ
いつるたまかとぞみる

おくやまにたぎりておつるたきつせにたまちるば
かりものなおもひそ

この歌、きふねの明神の御返し也。おとこご多にて、
みゝにきこえけるとかや。

とあり、『古本説話集』上巻第六話と同文話を有する『世
継物語』もほとんど同文の記述が見える。高橋貢訳注『古
本説話集』上（講談社学術文庫・二〇〇一年）によれば、
『古本説話集』第六・七・八・九話は、『世継物語』にお
いても全く同じ配列で同文話が見出され、両書の関係はあ
る共通の散逸文献から別々に同じ話を引用したものだと思
えられている。また、『無名草子』（新編日本古典文学全
集本による）の

和泉式部、歌数など詠みたることは、まことに、女の
かばかりなる、ありがたくぞはべるらむ。心ざま、振
る舞ひなどぞ、いと心にくからず、かばかりの歌ども
詠み出づべしともおぼえはべらぬに、しかるべき前の

世のことにこそあんめれ。この世一つのこととはおほ
えず。その中にも、保昌に忘れられて、貴船に百夜参り
て、

もの思へば沢の蛭も我が身よりあくがれ出づる魂
かとぞ見る

と詠みたるなど、まことにあはれにおぼえけり。

奥山にたがりて落つる滝つ瀬に玉散るばかりもの
な思ひそ

と御返しありけむこそ、いとめでたけれ。

という記述から始まる部分に、『古本説話集』や『世継物
語』の当該部分と大体同じ順序で配列される同話題が見出
されることからすれば、『無名草子』も同じ散逸文献から
の影響があつたと考えられるという。しかも、『古本説話
集』第九話（それに『世継物語』の当該箇所）に「白河院
は曾孫おはし申しけれ」という一文があることからすると、
「白河」という院へのおくりなは院没後のことなので、問
題の散逸文献の成立は、白河院没の大治四年（一一二九）
をあまり離れない頃だと考えられるという。だとすると、
そのころには、後拾遺集一一六二番歌詞書で「をとこ」と
あるところに保昌を比定し「あくがれいづる」系本文を有
する記述をもつ何らかの文献が存在したことになる。
それに対して『十訓抄』（古典文庫本による）に収載さ

れているのは、

和泉式部ガ男ノカレトナリケル比、貴船ニ詣タリケルニ、ホタルノトブヲミテ、

物思ヘバ沢ノホタルモ我身ヨリ　アクガレ出ル玉カトゾミル

トナガメケレバ、社ノ内ヨリ忍ビタル御声ニテ、カク聞エケリ。

オク山ニタギリテ落ルタキツセノ　タマチルバカリ物ナオモヒソ

ソノシルシアリケルトゾ。

で、これは、「男」に保昌を比定せず、歌は「あくがれいづる」系本文を有する。『古今著聞集』は『十訓抄』による追記抄入話であるので、基本的に同文。『沙石集』（新編日本古典文学全集本による）第五末ノ七も、

和泉式部、男かれがれなりける時、貴船に籠りて、螢の飛ぶを見て、

もの思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る

かくながめければ、御殿の中に、忍びたる御声にて、奥山にたぎりて落つる滝津瀬の玉散るばかりもの

な思ひそ

と、『十訓抄』とほぼ同じである。

五　まとめ――「あくがれにける」系本文と「あくがれいづる」系本文と

以上に述べ来たったところによって、いささかのまとめを試みる。

後拾遺集の諸本内での一一六二番歌の本文異同の状況を見た場合、現存諸本についていうなら、各系統の純粋な本文を有する伝本は皆無で、本文はきわめて初期の段階から混雑現象を繰り返し、諸本自体の内実は複雑をきわめているということであるから、一一六二番歌の第四句の本文異同の場合も明快な整理を許さないようである。しかし、撰者自筆本の面影を伝える貴重な古本として位置づけることができるという長承三年本の鎌倉初期転写本たる冷泉家蔵為家相伝本の根幹本文、それと極めて近い関係にあるらしい長承三年本の鎌倉時代後期転写本たる歴博蔵田中家旧蔵本、またその奥書に通俊自筆本によって校合を加えたことをいう太山寺蔵本、の三者に共通して「あくがれにける」系本文を有することは見過ごすことのできないことであり、そのことは、それが撰者自筆本における一一六二番歌

の本文であつた可能性を示唆しているようにも思われる。

また、当該歌の受容という観点で見た場合、俊頼・基俊・定家といった当代の錚々たる歌人たちが想起した一一六二番歌は「あくがれにける」系本文であつたようで、そのことは重視されてよい。

ただその一方で、「あくがれいづる」系本文も、例えば冷泉家蔵為家相伝本においてその根幹本文書写と同時期の作業がほとんどであると見なしてよいとされる傍記本文に存在すること、院政期の代表的な歌学者である藤原範兼や藤原清輔が想起した一一六二番歌は「あくがれいづる」系本文であつたこと、また、『古本説話集』『世継物語』『無名草子』所載の和泉式部詠歌と貴船神詠との出典である院政期の散逸文献においても当該歌は「あくがれいづる」系本文を有していたらしいこと、などの諸点から考えると、「あくがれいづる」系本文も早くから存在し、受容の上でも相当の影響力を持つていたことはやはり無視し得ない。そして何より、その本文がその後の当該歌流布の中心となつている点は重要である。例えば、藤本一恵『後拾遺和歌集全釈』が、その底本とした太山寺蔵本によつて「あくがれにける」系本文を採用しながらも、「〇わが身よりあくがれにけるたまかとぞみる 我が身からさまよい出た魂かとみられることよ。「あくがれにける」一本―あくがれいづる この方がよいか。ただし、蓮華王院撰者自筆本と校

合済みの底本に「あくがれにける」とあるのでそれに依つておく」と注するのは、当該歌の受容における「あくがれいづる」系本文の現代まで続く影響力の大きさをまざまざと見せつける事例である。

(ふくしま・ひさし 本学教授)